

『庭のをしへ（略本）』語彙索引（稿） 付属語篇

若 林 俊 英

黒 沢 絵 美

凡 例

一 この索引は、『庭のをしへ（略本）』に用いられているすべての単語を収載したものである。語の認定は、おおむね学校文法によった。

二 この索引の本文は、『扶桑拾葉集』所収本を翻刻した、『校註 阿佛尼全集 増補版』（築瀬一雄氏編、風間書房刊）所収の「庭の訓（略本）」によった。ただし、本文の引用に当たっては、句読点などを省略し、漢字は新字体に改めた。

三 本文の誤植と思われる箇所については私に訂正した。漢字の読みについて

四
1 「御」は、慣行によって一往読み分けた。
2 「夜」は「よ」に、「候」は「さぶらふ」に、それぞれ統一した。

五 語彙索引について

1 この索引は、Ⅰ自立語篇 Ⅱ付属語篇よりなる。
2 見出し語は、単語・複合語・接辞、ないし一つづきにした方がよいと思われる語句を掲げた。接辞を含む語、複合語、一つづきの語においては、そのままの形の他に、これらを構成している単位に分解した形でもあげた。
3 語の配列の見出しは、五十音順に従ったが、同音の語にあつては、原則として、次のような順によった。

名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・接統詞・感動詞・接頭語・接尾語
4 語の所在は、本文の頁数・行数で示した。
5 活用語は、原則として終止形の項にまとめ、各活用に従って分類したものを列挙した。なお、次の略

号を用いた。

未然形Ⅱ未

連用形Ⅱ用

終止形Ⅱ止

連体形Ⅱ体

已然形Ⅱ已

命令形Ⅱ命

ただし、形容詞・形容動詞の語幹は、幹とし、未然形の前に示した。

6 見出し語の括弧について。(一)内に意味識別上の便宜から、できるだけ漢字を当てた。(二)内には文法的機能を示した。後者にあつては、次の略号を用いた。

名詞Ⅱ名

代名詞Ⅱ代名

形容詞Ⅱ形 形

容動詞Ⅱ形動

副詞Ⅱ副

連体詞Ⅱ連体

接続詞Ⅱ接

感動詞Ⅱ感

助動詞Ⅱ助動

助詞Ⅱ助

接頭語Ⅱ接頭

接尾語Ⅱ接尾

枕詞Ⅱ枕

ただし、動詞については(四)(上二)(上三)のごとく活用の種類を示した。

7 付属語においては、使用の便を考えて、接続等により、ある程度分類したものもある。

六 解釈上不安定な部分があり、不備な点が多い。博雅の方のご教示を賜りたい。

Ⅱ付属語

か

か(助)

何とか申しつる

↓とかや・あるかなきか

が(助)

己が様々になりぬべく

二十年が内

およすげたるがよき事にて候

世継が代

誰が冠

彼が靴

己がよゝに生ひ別れ

見聞きて候はむ事が世に漏れ聞え

其れがさるまじきにて

かし(助)

一わたり御覧候へかし

引かれさせ給ひ候へかしと

↓ぞかし

かな(助)

一四五①

一四一②

一四一⑨

一四二③

一四四②

一四四④

一四四⑩

一四五⑫

一四七②

一四三⑦

一四九①

心苦しき業かなと

き

き(助動)

し(体)

思ひしに

さは契りしと

諫めしものを

すゝめ申しゝを

思し召して候ひし

あらぬ事を言ひし程に

頼みし松

見候ひし程

心ならず候ひし

思ひ候ひしに

三年を過し待りしに

明し暮して候ひしに

袖触れしとは無くとも

しか(已)

御能にて候しかば

候はざりしかども

一四五⑭

け

けむ(助動)

けむ(体)

あざむきけむ様に

こ

こそ(助)

I 体言+こそ

齡こそ美しく物は思ひ知られ候へ

聖こそ彼の御所のきえんよ

II 連体形+こそ

見え候こそ余りにいとほしく思ひ参らせ候へども

III 連用形+こそ

物憂くこそなり候へ

ごとし(助動)

ごとく(用)

根の絶えぬものにて候如く

さ

さす(助動)

一四六①

一四三⑪

一四七⑨

一四一⑨

一四九⑨

一四一④

一四一⑧

一五〇⑬

させ〈用〉

現としも候はねば

一四一⑭

忍ばれさせ給ひ候はむずる

一四二⑨

覚えさせおはしまし候へと

一四三④

覚えさせおはしまし候へ

一四三⑥

打ちとけさせ給ひ候まじく候

一四四⑩

加へさせ給ふまじく候

一四五①

果てさせ給ひ候はむ事も

一四六②

罷出させ給ふべく候

一四六⑧

奏せさせ給ひ

一四六⑨

持ち参らせ給ひ候はゞ

一四六⑪

御身をさすらへさせ給ひ候まじく候

一四八⑭

引かれさせ給ひ候へかしと

一四九①

言はれさせ給ひ候はむ事

一四九⑨

御覽ぜさせ給ひ候へ

一四九⑪

御覽ぜさせおはしまして

一五一③

入れさせましまし候べく候

一五一④

し

して(助)

さるべき序して

一四六⑧

水すさまじくしても

一四八⑥

しも(助)

じ(助動)

じ〈止〉

御代の尽きじ候まじければ

一四二⑧

心向けを違へじと

一四七⑩

風にも当てじと

一四八⑤

す

す(助動)

せ〈用〉

振舞はせましまし候まじく候

一四二②

渡らせおはしまし候へ

一四二⑤

書かせ給ひ候程に

一四二⑦

書かせ給ひ候べく候

一四二⑫

弾かせおはしまし

一四三⑩

弾かせおはしまし候べく候

一四四①

振舞はせおはしませ

一四四⑦

色にも出させ給はで

一四六⑦

過ぐさせ給ひ候べく候

一四六⑫

御心を配らせ候ひ

一四九④

憐ませおはしませ

一四九⑤

御前に候はせて

一四九⑧

保たせおはしませ

一四九⑧

頼ませおはしませ

一四九⑩

人に賜はせ候はむに

一五〇①

出させおはしませ

一五〇③

持たせおはしまし候べく候

一五〇④

打払はせ給ひ候べく候

一五〇⑬

嘗ませおはしまし候べく候

一五一①

ず(助動)

ず(用)

心定らず

一四一⑭

謬たず

一四三③

言葉も続かず

一四四③

濃からず

一四四⑥

薄からず

一四四⑥

親しからず

一四四⑦

遠からず

一四四⑦

聞かずなりぬる

一四五③

打ちとけにくき物は候はず候

一四五④

覚えず候へば

一四七⑤

命も惜しからず覚えて

一四八⑩

ざり(用)

候はざりしかども

一四六①

ず(止)

名をば埋まず

一四八①

ぬ(体)

思ふこと絶えぬ八橋

一四一⑥

思ひ定まらぬ事にて候なるを

一四一⑩

進み後れぬ程に

一四二⑤

見知り候はぬ様に

一四二⑪

魂の候はぬも悪く候ぞ

一四三②

強ひても申し候はぬ

一四三⑤

時世をも知らぬ徒事

一四四③

善からぬ事にて候

一四四④

見醒めせぬ様は候はぬぞ

一四四⑥

見醒めせぬ様は候はぬぞ

一四四⑥

常ならぬ世

一四五⑨

申し沙汰する事は候はぬ事にて候

一四五⑬

知られ参らせ候はぬ様なる事

一四六⑥

見えぬ世

一四七③

誰踏分くとも候はぬ庭

一四七⑥

猶飽かぬ心地して

一四八⑨

目に見えぬ神仏

一四八⑪

根の絶えぬもの

一五〇⑫

ね(已)

現としても候はねば

一四一⑭

さるまじきにて候はねども

一四七③

↓あらぬ・かずならず・ころならず

そ

ぞ(助)

魂の候はぬも悪く候ぞ

一四三②

見醒めせぬ様は候はぬぞ

一四四⑥

安く候ぞ

一四五⑧

万づ心にくよく候ぞ

一四五⑨

余りに悲しく候ぞ

一四六⑪

暗き闇にぞ迷ふらむ

一四七⑧

申し思ふ人の候ぞ

一四七⑫

↓ぞかし・とぞ・いかにぞや

ぞかし

と申すぞかし

一四八①

た

だに(助)

思ひだになく

一四一⑤

たり(助動)

たら(未)

幾年積りたらむ人よりも

一四一⑪

さるべき人など参りたらむに

一四四⑩

舟を浮べたらむよりと

一四五④

たる(体)

およすがたるが

一四二③

余りにおよすがたるも

一四二④

余りに不用めきたるも

一四二⑤

取立てたる御能

一四二⑬

御名を上げたる御能

一四三⑪

契り置きたる事

一四七②

定め置きたる宿業

一四七③

山里に籠り居たる事

一四八④

老の開けたる心地して

一四八⑦

物知りたる尼

一四九⑩

つ

つ(助動)

つる(体)

何とか申しつる

一四五①

て

て(助)

I 動詞（含む補助動詞）十て

憂きをも忍び過ぐして
帰る浪をのみ羨みて
見参らせて候程に
御心を添へて
人の漏れ聞きて
御草紙など給はりて
御覽ぜられ候べく候て
書き習ひて
描き習ひて
夜の鶴に細かに申して候
物憂げに思し召して
加はり給ひ候はむにつけて
御心に入れて
習はし初め参らせて候へば
上手の名を取り給ひて
人に向ひて
心を選びて
御簾の際近く居寄りて
謬ちて
申し習はして候へば
親の掟に従ひて

一四一②
一四一⑥
一四一⑫
一四二①
一四二②
一四二⑦
一四二⑨
一四二⑪
一四二⑭
一四三③
一四三④
一四三⑥
一四三⑥
一四三⑨
一四四①
一四四②
一四四⑦
一四四⑭
一四五①
一四五⑤
一四五⑦

世に漏れ聞えて
松も枯れはてゝ
人の見聞きて候はむ事
程につけて
身の数ならず候にともなひて
あたらしき様に覚え候て
御事と思し召して
御様変へて
心慰めて
古き人など参りて
誰は彼処へ行き
其れによりて
蓬は軒を争ひて
その光をと思し召して
思ひ参らせ候ひて
さる違目候ひて
恨みをなして
傳き据ゑ参らせ候て
老の開けたる心地して
飽かぬ心地して
いとほしく思ひ参らせて候人もがな
命も惜しからず覚えて

一四五⑧
一四五⑩
一四五⑫
一四五⑭
一四六②
一四六③
一四六⑥
一四六⑩
一四六⑫
一四六⑬
一四六⑭
一四七④
一四七⑥
一四七⑧
一四七⑩
一四八③
一四八③
一四八⑤
一四八⑧
一四八⑨
一四八⑩
一四八⑩

忝く恨み参らせ候て

明し暮して候ひしに

憂き世の様は思ひ知りて

深く思し取りて

思ひ参らせ候て

一時を定めて

御心を留めて

人に違ひて

御心に染めて

取分き植ゑて

思し召しよそへて

思し召し知りて

御覽ぜさせおはしまして

II 形容詞十て

知る人多くて

III 助動詞十て

思ひ定まらぬ事にて候なるを

人は心にて候なり

徒事にて候

よき事にて候

憎き事にて候

おしはからるゝ事にて候

一四八⑪

一四八⑫

一四八⑬

一四八⑭

一四九②

一四九⑧

一四九⑪

一五〇⑥

一五〇⑦

一五〇⑧

一五〇⑨

一五一①

一五一③

一四四④

一四四④

一四一⑩

一四一⑬

一四一⑭

一四二③

一四二④

一四二⑦

忍ばれさせ給ひ候はむずるつまにて候

女房の進み書くまじき物にて候へども

取立てたる御能にては候まじく候へども

艶なる姿引取られて

あはれなる物の音にて候

御名を上げたる御能にて候しかば

善からぬ事にて候

浅ましき事にて候

窓の内一つに傳かれて

心細き事にて候

申し沙汰する事は候はぬ事にて候

軋ひ争ふ事にて候

御心苦しき事にて候べく候

知られ参らせ候はぬ様なる事にて候とも

契り置きたる事にて候へば

さるまじきにて候はねども

籠り居たる事にて候

心のまゝになる事は少き事にて候

人は心にて候なり

供養する事有るまじくて

御前に候はせて

浅間しき御事にて候

一四二⑨

一四二⑩

一四二⑬

一四三②

一四三⑧

一四三⑪

一四四④

一四四⑨

一四五⑦

一四五⑪

一四五⑬

一四五⑭

一四六⑤

一四六⑥

一四七②

一四七③

一四八④

一四八⑭

一四九③

一四九⑤

一四九⑧

一四九⑩

搔交の匂にて候はで

一五〇②

御心の末床しき様に

一五〇④

あはれなる物にて候

一五〇⑧

根の絶えぬものにて候如く

一五〇⑬

仮寝の夢にて候へば

一五〇⑭

↓ かまへて・しひて・ては・ても・とて・とてもかく

ても・にて・まして・わきて

で(助)

御身を去らでと

一四一②

覚え候はで

一四一③

憎気には候はで

一四四⑨

見え参らせ給ひ候はで

一四六⑦

色にも出させ給はで

一四六⑧

たゞ心苦しからでありなむ

一四七⑪

匂にて候はで

一五〇②

御心を苦しめ候はで

一五一①

ては

争ふ人など候ひては

一四六④

朝に起きては

一四八⑦

ても

歌の題などに付けても

一四二⑩

甲斐々々しく候はむにつけても

一四六④

庭の浅茅を眺めても

一四七⑦

衾を重ねても

一四八⑤

千尋を齎ひても

一四八⑧

寝ても覚めても

一四九①

寝ても覚めても

一四九①

花鳥につけても

一五〇⑨

と

と(助)

I 連用形＋と

まして如何にと

一四一⑩

II 終止形＋と

背くとならば

一四六⑩

見えぬ世よりさるべしと

一四七③

親の心向けを違へじと

一四七⑩

名をば埋まずと

一四八①

荒き風にも当てじと

一四八⑤

少き事にて候と

一四八⑭

払はむと

一五〇⑪

III 連体形＋と

さやは契りしと

一四一③

さぞげに思し召し候らむと

一四一⑤

世に漏れ聞え候はむずると

一四五⑫

心憂かるべきと

一四八②

衣や薄く思し召すらむと

一四八⑥

袖触れしとは

一五〇⑥

IV 命令形十と

覚えさせおはしまし候へと

一四三④

V 体言十と

現としも候はねば

一四一⑭

その跡と

一四二⑧

八の御歳と

一四三⑩

何とか申しつる

一四五①

僻事と

一四七⑫

偽り申す事と

一四九②

法の師とは

一四九⑩

VI 助詞十と

御身を去らでと

一四一②

諫めしものをと

一四一④

節々もやと

一四一⑫

書かせ給ひ候程にと

一四二⑦

舟を浮べたらむよりと

一四五⑤

心苦しき業かなと

一四六①

忝き君の御事をと

一四六⑥

櫛の柱も懐しかるべきをと

一四七⑦

如何でその光をと

一四七⑧

とてもかくてもと

一四七⑫

いとほしく思ひ参らせて候人もがなと

一四八⑩

引かれさせ給ひ候へかしと

一四九②

↓とかや・とぞ・とて・とも・なにとやらむ

とかや

海龍王の后とかや

一四七⑨

とぞ

やう有る事にとぞ思し召し候へ

一四五⑤

とて

さればとて

一四二③

さればとて

一四三②

とも(助)

在らまほしく思し召す御事候とも

一四二①

知られ参らせ候はぬ様なる事にて候とも

一四六⑥

所は改り候とも

一四七④

いみじき事候べしとも覚えす候へば

一四七⑤

誰踏分くるとも候はぬ庭

一四七⑥

畏き僧など申し候とも

一四九⑥

袖触れしとは無くとも

一五〇⑥

ども(助)

いとほしく思ひ参らせ候へども
御心苦しく候へども

一四一④
一四一⑪

進み書くまじき物にて候へども

一四二⑩

御能にては候まじく候へども

一四二⑬

勝り甲斐ある様に候へども

一四四⑤

候はざりしかども

一四六①

さるまじきにて候はねども

一四七③

骨をば埋めども

一四八①

御いたはしく候へども

一四八⑬

如何に掃捨て候へども

一五〇⑫

な

など(助)

思し召し嘆きさぶらはむずる事など

一四一⑦

二十年が内などは

一四一⑨

御草紙など給はりて

一四二⑦

歌の題などに付けても

一四二⑩

物語絵など遊ばし候へ

一四二⑭

古今・新古今などの歌

一四三③

源氏・世継など

一四三⑦

御琵琶に合せ参らせ候など

一四三⑪

さるべき人など参りたらむに

一四四⑩

賀茂の社の河浪などの様
剛々しき様になどは

一四四⑪
一四四⑬

彼が靴の音など

一四四⑭

申し笑ふ事など候はむに

一四四⑭

如何など尋ね申す人

一四五②

聞かずなりぬるなど

一四五③

人に聞かせなどし候へば

一四五⑨

争ふ人など候ひては

一四六④

古き人など参りて

一四六⑬

心安き住居なれなど

一四六⑭

さる御住居などは

一四八⑫

御行末など迄

一四九①

御仏事などの候はむ時は

一四九④

畏き僧など申し候とも

一四九⑥

御仏事など候はむ時は

一四九⑦

御所のきえんよなど

一四九⑨

御薫物など合せられ

一四九⑪

香具調ふ数など候はむは

一五〇①

御匂など

一五〇②

なり(助動・断定)

なら(未)

背くとならば

一四六⑩

無縁ならむをば

に〈用〉

思ひ定まらぬ事にて候なるを

人は心にて候なり

徒事にて候

よき事にて候

憎き事にて候

おしはからるゝ事にて候

忍ばれさせ給ひ候はむずるつまにて候

女房の進み書くまじき物にて候へども

見知り候はぬ様に候はむは

取立てたる御能にては候まじく候へども

磨きくたせる方には候まじく候

あはれなる物の音にて候

御名を上げたる御能にて候しかば

善からぬ事にて候

勝り甲斐ある様に候へども

浅ましき事にて候

河浪などの様には候まじく候

心細き事にて候

申し沙汰する事は候はぬ事にて候

軋ひ争ふ事にて候

一四九⑤

御心苦しき事にて候べく候

一四六⑤

一四一⑩

知られ参らせ候はぬ様なる事にて候とも

一四六⑥

一四一⑬

契り置きたる事にて候へば

一四七②

一四一⑭

さるまじきにて候はねども

一四七③

一四二③

籠り居たる事にて候

一四八④

一四二④

心のまゝになる事は少き事にて候

一四八④

一四二⑦

人は心にて候なり

一四九③

一四二⑨

浅間しき御事にて候

一四九⑩

一四二⑩

搔交の勾にて候はで

一五〇②

一四二⑪

御心の末床しき様にて

一五〇④

一四二⑬

あはれなる物にて候

一五〇⑧

一四三①

根の絶えぬものにて候如く

一五〇⑫

一四三⑧

仮寝の夢にて候へば

一五〇⑭

一四三⑪

なる〈体〉

一四四④

一四四④

徒事なるすゞろ文

一四四④

一四四⑤

其の人に一つなる様に

一四四⑧

一四四⑨

知られ参らせ候はぬ様なる事

一四六⑥

一四四⑨

なれ〈己〉

一四六⑬

一四四⑪

心安き住居なれ

一四六⑭

一四五⑪

↓あはれなり・あまりなり・いかなり・うらめしげなり・えんなり・おんつれづれなり・かすかなり・かずならず・かたほなり・こころならず・こまかなり

一四五⑬

一四五⑭

・こまやかなり・さすがなり・さまざまなり・さや
うなり・しづかなり・そらなり・つねなり・にくい
げなり・はかなげなり・はなやかなり・はるかなり
・まれなり・ものうげなり

なり（助動・推定伝聞）

なり（止）

人は心にて候なり

一四一 ⑬

人は心にて候なり

一四九 ③

なる（体）

思ひ定まらぬ事にて候なるを

一四一 ⑩

なれ（已）

いみじき事侍るなれ

一四六 ⑭

に

に（助）

I体言十に

御文に諫めし

一四一 ③

都鳥に言問ふ

一四一 ⑤

蜘蛛手に思ふ

一四一 ⑥

三十に余り候

一四一 ⑧

見参らせて候程に

一四一 ⑫

世に並び無く候

一四一 ⑬

御心に御心を添へて

若き程に

進み後れぬ程に

書かせ給ひ候程にと

畏き君に

夜の鶴に細かに申して候

御心に入れて

御琵琶に合せ参らせ候など

人に向ひて

人に向ひ候へば

其の人に一つなる様に

一つなる様に言ひなされ候へば

床しき様に御入り候べく候

剛々しき様などは

あらぬ事を言ひし程に

人の心程に

何の道に車を摧き

何の流に舟を浮べたらむよりと

やう有る事にとぞ

窓の内一つに傳かれて

親の掟に従ひて

世を過す程に

一四一 ⑭

一四二 ④

一四二 ⑤

一四二 ⑦

一四二 ⑧

一四三 ③

一四三 ⑥

一四三 ⑩

一四四 ②

一四四 ⑧

一四四 ⑧

一四四 ⑧

一四四 ⑫

一四四 ⑬

一四五 ②

一四五 ③

一四五 ④

一四五 ④

一四五 ⑤

一四五 ⑦

一四五 ⑦

一四五 ⑦

世に漏れ聞えて
 人に聞かせなどし候へば
 己がよゝに生ひ別れ
 世に経るたづき
 世に漏れ聞え候はむずると
 他処に遠き人の
 程につけて
 見候ひし程に
 あたらしき様に覚え候て
 事々しき様に
 其れによりて
 暗き闇にぞ迷ふらむ
 あざむきけむ様に思ひ参らせ候ひて
 世に僻事と覚え候
 山里に籠り居たる
 朝に起きては
 髪の筋毎に千尋を齎ひても
 目に見えぬ神仏
 下れる様に御身をもてなす人も
 心のまゝになる事は
 いみじき例に引かれさせ給ひ候へかし
 幾度も申し候様に

一四五⑧
 一四五⑨
 一四五⑩
 一四五⑪
 一四五⑫
 一四五⑬
 一四五⑭
 一四六①
 一四六③
 一四六⑨
 一四七④
 一四七⑧
 一四七⑨
 一四七⑫
 一四八④
 一四八⑦
 一四八⑧
 一四八⑪
 一四八⑬
 一四八⑬
 一四九①
 一四九③

御前に候はせて
 一日に一時を定めて
 人に賜はせ候はむに
 見所有る様に
 人に違ひて
 御心に染めて
 花鳥につけても
 火に入れさせましまし候べく候
 II 連体形十に
 御身を去らでと思ひしに
 起伏し嘆かれ候に
 加はり給ひ候はむにつけて
 ハの御歳と覚え候に
 参りたらむに
 申し笑ふ事など候はむに
 身の数ならず候にともなひて
 甲斐々々しく候はむにつけても
 暗きに迷はむ事
 申しすゝめ候はむずるに
 思ひ候ひしに
 三年を過し侍りしに
 明し暮して候ひしに

一四九⑧
 一四九⑧
 一五〇①
 一五〇④
 一五〇⑥
 一五〇⑦
 一五〇⑨
 一五一④
 一四一②
 一四一③
 一四三⑥
 一四三⑩
 一四四⑩
 一四四⑭
 一四六②
 一四六④
 一四六⑩
 一四七①
 一四八⑩
 一四八⑪
 一四八⑫

人に賜はせ候はむに

一五〇①

人のまねぶ事候はむに

一五〇②

III その他十に

歌の題などに付けても

一四二⑩

↓ かりにも・とにかくに・にて・には・にも・よろづに

にて(助)

果無き筆のすさみにて

一四二⑥

七にて御今参りの夜も

一四三⑨

院の御前にて弾かせおはしまし

一四三⑩

山賊にて果てさせ給ひ候はむ事も

一四六②

彼は何地にて心安き住居なれ

一四六⑭

微かなる御住居にて

一四七⑤

さる心細き有様にて

一四八④

仏の御前にて

一四九⑦

には

筆のすさみには書かせ給ひ候べく候

一四二⑫

御徒然ならむ折には

一四二⑭

人には濃からず：振舞はせおはしませ

一四四⑥

さやうの人には

一四四⑨

万づの人にはいたはり傳かれ

一四八⑨

果無き世には御心を苦しめ候はで

一五一①

にも

後にも：など尋ね申す人候はゞ

一四五①

色にも出させ給はで

一四六⑦

仏にも縁を結び

一四七②

木にも草にも契り置きたる事にて候へば

一四七②

木にも草にも契り置きたる事にて候へば

一四七②

親しきにも疎きにも恨みをなして

一四八③

親しきにも疎きにも恨みをなして

一四八③

荒き風にも当てじと

一四八⑤

御薫物など合せられ候はむにも

一四九⑪

ぬ

ぬ(助動)

な(未)

見定め参らせ給ひなば

一四六⑧

たゞ心苦しからでありなむ

一四七⑪

ぬ(止)

己が様々になりぬべく候事の

一四一②

思し分きぬべく

一四一⑪

もどき譏りぬべからむ事をば

一四二②

ぬる(体)

聞かずなりぬるなど

一四五③

申し続け候ひぬる

一五一②

の

の(助)

I 体言十の十体言

難波の事

一四一①

事のよしあし

一四一①

近き程の思ひ

一四一⑤

八橋の名

一四一⑥

心の内

一四一⑦

三十に余り候の程の齡

一四一⑨

歳の程

一四二③

筆のすさみ

一四二⑥

人の御程

一四二⑥

心の内

一四二⑥

御厨子の御草紙

一四二⑦

天皇の御代

一四二⑧

歌の題

一四二⑩

人の形

一四二⑬

女房の歌

一四三①

歌の姿

一四三②

五の御歳

一四三⑧

御今参りの夜

一四三⑨

院の御前

一四三⑨

八の御歳

一四三⑩

東宮の御琵琶

一四三⑩

上手の名

一四三⑪

何の筋

一四四②

春日野の雪

一四四⑪

雪の朝

一四四⑪

賀茂の社

一四四⑪

社の河浪

一四四⑪

御顔の置き所

一四四⑫

几帳のはづれ

一四四⑫

臂のもてなし

一四四⑬

御簾の際

一四四⑬

冠の額

一四四⑭

靴の音

一四四⑭

人の心

一四五③

何の道

一四五④

何の流

一四五④

親の掟

一四五⑦

世の習ひ

一四五⑩

呉竹の己がよゝに生ひ別れ

一四五⑩

遠き人の物を申し沙汰する事は

身の数ならず候に

百敷の御交ひ

君の御覚え

数ならぬ世の数

君の御事

人の御心

御心の程

淡々しき様の御事

宿業の此処を去り

西東の門

庭の浅茅

親の名残

櫛の柱

淡々しき様の御事

海龍王の后

親の心向け

後の憂き名

今の恥

泉の水

扇の風

常夏の花

花の匂

髪の筋毎

万づの人

憂き世の様

心のまゝ

春日の神

仏の御前

御所のきえん

法の師

搔交の匂

御扇の絵

御心の末

春の花

秋の紅葉

霜枯の前栽

前栽の冬

冬の景色

世の習ひ

五濁悪世の我等

輕慢懈怠の心

庭の草

仮寝の夢

一四八⑧

一四八⑧

一四八⑨

一四八⑫

一四八⑬

一四九②

一四九⑦

一四九⑨

一四九⑩

一五〇②

一五〇④

一五〇④

一五〇⑥

一五〇⑥

一五〇⑦

一五〇⑦

一五〇⑦

一五〇⑦

一五〇⑨

一五〇⑪

一五〇⑪

一五〇⑫

一五〇⑭

思ひ出のまゝ

万づの事

II 体言十の十用言

人の漏れ聞きて

御代の尽きじ候まじければ

女房の進み書くまじき物にて候へども

魂の候はぬも

御歳の加はり給ひ候はむにつけて

徒事の仰せられ候まじく候べく候

召使はれ候人の見聞きて候はむ事が

申し思ふ人の候ぞ

老の開けたる心地して

人のまねぶ事候はむに

根の絶えぬものにて候如く

III 体言十の十副詞

事のさやは契りしと覚え候はで

IV 助詞など十の十体言など

三十に余り候の程

古今・新古今などの歌

さやうの人

河浪などの様

あらいたはしの御住居や

御仏事などの候はむ時は

一四九④

↓いまのよ・かの・きのないしどの・この・さうのこ
と・その・のちのよ・ふでのすきみ・ほとけのみち
・まどのうち・むばたまの・もののね・よるのつる
のみ(助)

帰る浪をのみ羨みて

一四一⑥

は

は(助)

I 体言十は

物は思ひ知られ候へ

一四一⑨

たゞ人は心にて候なり

一四一⑬

人はたゞ歳の程よりも大人しく

一四二②

真名は女房の進み書くまじき物にて

一四二⑨

絵は取立てたる御能にては

一四二⑬

女房の歌は余りに事々しく

一四三①

趣は夜の鶴に細かに申して候

一四三③

歌は覚えさせおはしまし候へと

一四三④

箏の琴は別きてあはれなる物の音にて候

一四三⑧

人は一きは勝り甲斐ある様に候へども

一四四⑤

見醒めせぬ様は候はぬぞ

一四四⑤

打ちとけにくき物は候はず候

一四五④

一五一②
一五一②
一四二①
一四二⑧
一四二⑨
一四三②
一四三⑤
一四四③
一四五⑫
一四七⑫
一四八⑦
一五〇②
一五〇⑫
一四一②
一四一⑨
一四三③
一四四⑨
一四四⑪
一四六⑬

後は世に経るたづき稀に

一四五⑪

申し沙汰する事は候はぬ事にて候

一四五⑬

後の世は暗きに迷はむ事

一四六⑩

誰は彼処へ行きて

一四六⑬

彼は何地にて

一四六⑭

人は変り

一四七④

所は改り候とも

一四七④

葎は西東の門を閉ぢ

一四七⑤

蓬は軒を争ひて

一四七⑥

浅ましき世はたゞ心苦しからでありなむ

一四七⑪

なからむ後はとてもかくてもと

一四七⑫

寒き夜は衣や薄く思し召すらむと覚え

一四八⑥

暑き日は扇の風ぬるき事を心苦しく

一四八⑦

憂き世の様は思ひ知りて

一四八⑫

心のまゝになる事は少き事にて候

一四八⑬

人は心にて候なり

一四九③

御仏事などの候はむ時は

一四九④

御仏事など候はむ時は

一四九⑦

冬の景色は御心に染めて

一五〇⑦

妄想は庭の草

一五〇⑫

II 連用形十は

磨きくたせる方には候まじく候

一四三①

御心苦しくは強ひても申し候はぬ

一四三⑤

憎気には候はで

一四四⑨

河浪などの様には候まじく候

一四四⑪

III 連体形十は

見知り候はぬ様に候はむは

一四二⑪

香具調ふ数など候はむは

一五〇①

IV 副詞十は

大方は如何にも三十に余り候の程

一四一⑧

大方は如何なる貴き聖

一四九⑥

V 助詞十は

思し召し分き候はむ迄は

一四一①

二十年が内などは

一四一⑨

御能にては候まじく候へども

一四二⑬

剛々しき様になどはうたてしく候

一四四⑬

御住居などは御いたはしく候へども

一四八⑫

法の師とは頼ませおはしませ

一四九⑩

袖触れしとは無くとも

一五〇⑥

↓さは・ては・には・をば

ば(助)

I 未然形十ば

尋ね申す人候はゞ

一四五②

見定め参らせ給ひなば

一四六⑧

背くとならば

一四六⑩

持ち参らせ給ひ候はゞ

一四六⑪

思し召し候はゞ

一四九③

妄想妄念も起り候はゞ

一五〇⑬

II 已然形十ば

思ひ続け候へば

一四一⑧

現としも候はねば

一四一⑭

不用めきたるも悪しく候へば

一四二⑤

天皇の御代の尽きじ候まじければ

一四二⑧

余りに言ふ甲斐無く候へば

一四二⑪

習はし初め参らせて候へば

一四三⑨

御能にて候しかば

一四三⑪

立返り見候へば

一四四⑤

筋無き人に向ひ候へば

一四四⑧

一つなる様に言ひなされ候へば

一四四⑨

申し習はして候へば

一四五⑤

人に聞かせなどし候へば

一四五⑨

契り置きたる事にて候へば

一四七②

いみじき事候べしとも覚えず候へば

一四七⑤

親の名残留れば

一四七⑦

仮寝の夢にて候へば

一五〇⑭

↓されば

へ

へ(助)

誰は彼処へ行きて

一四六⑬

彼処へ行き

一四七④

きの内侍どのへまゐらせ候

一五一⑤

べし(助動)

べからへ未

もどき譏りぬべからむ事をば

一四二②

べくへ用

様々になりぬべく候事の

一四一②

思し分きぬべく

一四一⑪

思し召し候べく候

一四二⑧

御覽ぜられ候べく候て

一四二⑨

書かせ給ひ候べく候

一四二⑫

弾かせおはしまし候べく候

一四四①

仰せられ候まじく候べく候

一四四③

仰せ交し候べく候

一四四⑧

御入り候べく候

一四四⑫

御心苦しき事にて候べく候

一四六⑤

罷出させ給ふべく候

一四六⑨

過ぐさせ給ひ候べく候

一四六⑫

思し召し候べく候

一四七⑩

持たせおはしまし候べく候

一五〇⑤

御覧じ候べく候

一五〇⑦

御心を付け候べく候

一五〇⑩

打払はせ給ひ候べく候

一五〇⑬

営ませおはしまし候べく候

一五一②

入れさせましまし候べく候

一五一④

べし〈止〉

果無げに仰せなすべし

一四五③

いみじき事候べしとも覚えず候へば

一四七⑤

御覧じ候べし

一五〇⑧

べき〈体〉

漏れ聞えてよかるべき事をば

一四五⑧

槇の柱も懐しかるべきをと

一四七⑦

心憂かるべきと

一四八②

↓さるべし

ま

まじ（助動）

まじく〈用〉

振舞はせましまし候まじく候

一四二②

御能にては候まじく候へども

一四二⑬

磨きくたせる方には候まじく候

一四三①

仰せられ候まじく候べく候

一四四③

打ちとけさせ給ひ候まじく候

一四四⑩

河浪などの様には候まじく候

一四四⑪

加へさせ給ふまじく候

一四五①

御事候まじく候

一四七①

御事候まじく候

一四七⑨

さすらへさせ給ひ候まじく候

一四八⑭

出され候まじく候

一五〇①

まじき〈体〉

渡りもやられ候まじき心の内

一四一⑦

進み書くまじき物にて候へども

一四二⑩

まじけれ〈已〉

天皇の御代の尽きじ候まじければ

一四二⑧

↓あるまじ・さるまじ

まで（助）

思し召し分き候はむ迄は

一四一①

今の代まで

一四四②

御行末など迄

一四九①

まほし（助動）

まほしく〈用〉

在らまほしく思し召す御事候とも

一四二①

む

む(助動)

む(止)

心苦しからでありなむ

払はむと

む(体)

思し召し分き候はむ迄は

幾年積りたらむ人よりも

もどき譏りぬべからむ事をば

見知り候はぬ様に候はむは

御徒然ならむ折には

御歳の加はり給ひ候はむにつけて

さるべからむ物

さるべき人など参りたらむに

申し笑ふ事など候はむに

何の流に舟を浮べたらむよりと

見聞きて候はむ事が

果てさせ給ひ候はむ事も

甲斐々々しく候はむにつけても

暗きに迷はむ事

なからむ後は

無からむ後の憂き名

御仏事などの候はむ時は

無縁ならむをば

御仏事など候はむ時は

言はれさせ給ひ候はむ事

合せられ候はむにも

人に賜はせ候はむに

数など候はむは

まねぶ事候はむに

如何に多く候はむ

↓なにとやらむ

むず(助動)

むずる(体)

思し召し嘆きさぶらはむずる事など

忍ばれさせ給ひ候はむずるつまにて候

漏れ聞え候はむずると思し召し候へ

申しすゝめ候はむずるに

美しく候はんずるを出させおはしませ

も

も(助)

I名詞+も

一四八①

一四九④

一四九⑤

一四九⑦

一四九⑨

一四九⑪

一五〇①

一五〇①

一五〇②

一五一③

一四一⑦

一四二⑨

一四五⑫

一四七①

一五〇③

難波の事のよしあしも
 都鳥に言問ふ便りも
 八橋の名も羨めしく
 人の御程も心の内も
 人の御程も心の内も
 御今参りの夜も
 何の筋も無く
 言葉も続かず
 御知る人も
 松も枯れはてゝ
 宮仕も
 思ひ定め参らせ候事も
 果てさせ給ひ候はむ事も
 百敷の御交ひも
 二年も三年も
 二年も三年も
 宮達一所も
 櫛の柱も
 花の匂も
 心もつき
 命も惜しからず覚えて
 御身をもてなす人も

一四一①
 一四一⑤
 一四一⑥
 一四二⑥
 一四二⑥
 一四三⑨
 一四四②
 一四四③
 一四四⑦
 一四五⑩
 一四五⑭
 一四六①
 一四六②
 一四六③
 一四六⑦
 一四六⑦
 一四六⑦
 一四六⑪
 一四七⑦
 一四八⑧
 一四八⑩
 一四八⑩
 一四八⑬

春日の神も
 幾度も申し候様に
 御扇の絵も
 秋の紅葉も
 近き前裁も
 妄想妄念も
 憂き事も
 いみじき事も
 をこがましき事も
 II連用形十も
 渡りもやられ候まじき心の内
 III連体形十も
 世に並び無く候も
 余りにおよすげたるも
 余りに不用めきたるも
 魂の候はぬも
 IV副詞十も
 強ひても申し候はぬ
 猶も無縁ならむをば
 返々もただ果無き世の習ひをば
 V助詞十も
 憂きをも忍び過ぐして

一四九②
 一四九③
 一五〇④
 一五〇⑥
 一五〇⑧
 一五〇⑩
 一五〇⑬
 一五〇⑭
 一五〇⑭
 一五一③
 一四一⑦
 一四一⑭
 一四二④
 一四二⑤
 一四三②
 一四三⑤
 一四三⑤
 一四九⑤
 一五〇⑧
 一四一①

幾年積りたらむ人よりも

一四一⑪

歳の程よりも

一四二③

時世をも知らぬ

一四四③

在るか無きかも

一四六⑤

御心の程をも

一四六⑧

今の恥よりも

一四八②

泉の水すさまじくしても

一四八⑥

↓いかにも・かりにも・しも・つゆも・ても・とても

かくても・とも・にも・もや

もがな(助)

いとほしく思ひ参らせて候人もがなと

一四八⑩

ものを(助)

御文に諫めしものと

一四一③

もや

御覧じ留めらるゝ節々もやと

一四一⑫

や

や(助)

あらいたはしの御住居や

一四六⑬

衣や薄く思し召すらむと覚え

一四八⑥

↓いかにぞや・さやは・とかや・なにとやらむ・もや

やらむ

↓なにとやらむ・や・む

よ

よ(助)

其の聖こそ彼の御所のきえんよ

一四九⑨

より(助)

幾年積りたらむ人よりも

一四一⑪

たゞ歳の程よりも大人しく

一四二③

五の御歳より習はし初め参らせて

一四三⑧

世継が代より今の代まで

一四四②

何の流に舟を浮べたらむよりと

一四五⑤

まだ二葉より思ひ定め参らせ候事も

一四六①

見えぬ世よりさるべしと定め置きたる

一四七③

今の恥よりも心憂かるべきと

一四八②

雲井はるかにへだつかたより

一五一⑥

ら

らむ(助動)

らむ(体)

さぞげに思し召し候らむと

一四一⑤

我ゆる暗き闇にぞ迷ふらむ

一四七⑧

衣や薄く思し召すらむと覚え

一四八⑥

らる(助動)

られ〈用〉

御覽ぜられ候べく候て

一四二⑨

仰せられ候まじく候べく候

一四四③

合せられ候はむにも

一四九⑪

らるる〈体〉

御覽じ留めらるゝ節々もやと

一四一⑫

り

り(助動)

る〈体〉

磨きくたせる方には候まじく候

一四三①

下れる様に

一四八⑬

る

る(助動)

れ〈未〉

忍ばれさせ給ひ候はむずるつまにて候

一四二⑨

いみじき例に引かれさせ給ひ候へかしと

一四九①

言はれさせ給ひ候はむ事

一四九⑨

れ〈用〉

起伏し嘆かれ候に

一四一③

渡りもやられ候まじき心の内

一四一⑦

美しく物は思ひ知られ候へ

一四一⑨

艶なる姿引取られて

一四三②

言ひなされ候へば

一四四⑨

窓の内一つに傳かれて

一四五⑦

御身近く召使はれ候人の

一四五⑪

知られ参らせ候はぬ

一四六⑤

万づの人にはいたはり傳かれ

一四八⑨

出され候まじく候

一五〇①

るる〈体〉

おしはからるゝ事にて候

一四二⑥

を

を(助)

I 体言十を

御身を去らで

一四一②

帰る浪をのみ羨みて

一四一⑥

御心を添へて

一四一⑭

さる様を見知り候はぬ様に

一四二⑩

御名を上げたる御能

一四三⑪

上手の名を取り給ひて

一四三⑪

時世をも知らぬ徒事

一四四③

心を選びて

一四四⑦

御心を打ちとけさせ給ひ候まじく候

一四四⑩

言葉を加へさせ給ふまじく候

一四五①

あらぬ事を言ひし程に

一四五②

車を摧き

一四五④

舟を浮べたらむよりと

一四五④

世を過す程に

一四五⑦

物を申し沙汰する事は

一四五⑬

君の御事をと思し召して

一四六⑥

御心の程をも見定め参らせ給ひなば

一四六⑧

縁を結び

一四七②

此処を去り

一四七④

西東の門を閉ぢ

一四七⑥

軒を争ひて

一四七⑥

浅茅を眺めても

一四七⑥

如何でその光をと思し召して

一四七⑧

親の心向けを違へじと

一四七⑩

恨みをなして

一四八③

御事を傳き据ゑ参らせ候て

一四八⑤

衾を重ねても

一四八⑤

風ぬるき事を心苦しく

一四八⑦

千尋を齋ひても

一四八⑧

三年を過し侍りしに

一四八⑪

神仏を忝く恨み参らせ候て

一四八⑪

御身をもてなす人も

一四八⑬

御身をさすらへさせ給ひ候まじく候

一四八⑭

御心を配らせ候ひ

一四九④

一人を分き供養する事

一四九④

一時を定めて

一四九⑧

戒を保たせおはしませ

一四九⑧

物知りたる尼を

一四九⑩

御心を留めて

一四九⑪

御心を付け候べく候

一五〇⑨

其れを思し召し知りて

一五〇⑭

御心を苦しめ候はで

一五一①

仏の道を営ませおはしませ候べく候

一五一①

II 連体形十を

憂きをも忍び過ぐして

一四一①

思ひ定まらぬ事にて候なるを

一四一⑩

すゝめ申しゝを

一四三④

槇の柱も懐しかるべきをと

一四七⑦

美しく候はんずるを出させおはしませ

一五〇③

進み起り候を

一五〇⑪

↓ものを・をば

をば(助)

もどき譏りぬべからむ事をば

一四二②

かたほなる事をば引隠し

一四五⑧

よかるべき事をば

一四五⑧

骨をば埋めども

一四七⑫

名をば埋まず

一四八①

憂き名をば

一四八①

無縁ならむをば憐ませおはしませ

一四九⑤

果無き世の習ひをば

一五〇⑨

付記

本索引(稿)は、黒沢絵美さん(文学科専攻科一九九七年度卒業生)との共同作業によるものであるが、記載事項について責任は、若林にある。

(若林記)

自立語篇『城西文学』第二三号)訂正

七九頁(一八頁)・下段・六行目および九行目の

さぶらふ〈体〉の用例

一四一⑬ 一四九③を

さぶらふ〈止〉の用例とする。

八二頁(二二頁)・上段・四行目

すすみおくれ〈用〉を

すすみおくれ〈未〉とする。

* () 内は、抜き刷りの頁数。